

# 横井小楠の实学と西教

## 一 小楠の生涯と熊本藩の形勢

横井小楠（一八〇九—一八六九）の六十年の生涯は、世界史的には十九世紀前半に於ける国際資本主義の東洋進出の時代に当り、国内的には我が国近代民族国家創造への時代であった。明治維新はこのような民族と世界という国家そのものにとつて本質的な二つの条件が極度に緊張した情勢のもとに解決を迫り、その意味では日本歴史が本格的な民族の歴史となつたたぐい稀な時代である。非人稱的な民族でも国家を形成すると同時に、それは歴史の主体となりまた国内的には最高の主権を主張し、形式的には一応国家としての諸条件を完備したかのように看做される。Hallの「主権国は、しかしてただ主権国のみ、実にいかなる判決拒絶をも知らないのである」という言葉は近代国家の主権について語っているのであるが、それにもかかわらずなお徳川政権の独裁的法的権威と何ら矛盾するものでない。徳川政権が三百年の永きに涉つて権力を維持し得たことは、国家が稀薄な対外的条件のもとに於てもその姿勢を崩すものではないことを物語るものであるが、それは積極的な歴史の發展を慮外に置いての考え方であつて、国家の存在には対外的緊張が本質的な

## 今 中 寛 司

条件であることの意味が忘れられている。「国家権力は独立にして同時に最高なる権力である」と Jahnke がいつているように、国家は対内主権と同時に対外主権をも持つことよつて始めて必要にして充分な条件が充たされたといふべきで、このような国家こそ民族の歴史を積極的に發展せしめ、民族の歴史がいつかは持たなければならぬ世界史の中にあつて世界史を創造する歴史たり得るのである。一八五〇年代嘉永・安政年間、小楠四十才代にわが国は始めて世界史の勢力圏内入り、歴史的世界が本來的に持つ個と種と普遍、惣じて他を制約者として持つ主体の矛盾的構造に日本歴史の構造も切り換えられていったのである。近時の維新論争が維新革命を社会構造の面からだけ見て、これを絶対主義革命、或いはブルジョワ革命と規定し、石井孝氏の外庄に重点を置いた学説を高く評価しな行き方は、日本の置かれた特殊な歴史的条件を無視した誤りを犯しているのではなからうか。西洋の社会は既に早く古代から対外的に世界史的であり、ことに十八・九世紀に於ては Renke もいうように西洋の近代国家は國際的に完全な弁証法的構造を有し、このような国家群の社会革命と日本のそれとは目を同じくして語ることは許されない。明治維新の場合は、外庄が単に西欧世界政策の物理的圧

力として理解されてよいのではなく、日本の民族国家が始めて世界的に国家としての条件を対外的に充足した史実を最も大きく、評価すべきであると思う。小楠の思想や政治的実践も、また小楠の實学的学統に連らなる熊本洋学校や熊本バンドもこのような立場から觀察するならば、その歴史的意義は極めて大きく、小楠の如きは幕末封建社会の人でありながら、かれが日本史上に果した役割は世界史的民族国家というそのスケールと性格に於てそれ以前の歴史とは全く異つた世界に於ける業績であつたことを銘記すべきである。

このように世界史の中にある幕末社会が極めて政治史的であることは当然であつて、その限り小楠の生涯も本質的には政治史の中にある、かれの開明された思想も政治的実践の中から生れたものにならなかつた。

小楠の生涯は主として政治史的にこれを五期に分けることが出来る。第一期は三十二才頃までの修学時代、第二期は三十三才から三十九才頃までの実学党形成時代、第三期は四十七才から五十才頃までの実学党分裂期、第四期は五十才から五十六才頃までの実学豪農派形成と越前藩政改革指導時代、第五期は六十才より六十一才までの維新政権に参与した時代である。

### 第一期、修学時代

小楠は文化六（一八〇九）年、熊本城下の内坪井町に横井大平時直の次男として母永嶺かず子との間に生れた。<sup>(5)</sup>横井家は百五十石取奉行職という中級の藩士の家柄で、小楠は文化十三（一八一六）年、熊本藩校時習館に入り、文政六（一八二三）年、藩主細川春樹にお目見えしている。細川氏は三河国八名郡細川庄の出身で、織豊時

代には名君細川忠興の働きで豊前國小倉城を治め、その子細川忠利時代、寛永九（一六三二）年、肥後国熊本城を治めて五十四万石を領した。なお正保、寛文年間には肥後国宇土の三万石、肥後国高瀬の三万五千石を一族に分封したが、細川春樹は熊本藩主として初代忠興より教えて十代目に当る。第十一代藩主細川春樹は文政九（一八二六）年から万延元（一八六〇）年まで、第十二代細川慶順（昭邦）は万延元年から明治二（一八六九）年までの藩主である。天保二（一八三一）年、小楠の父時直が没し、兄左平太が横井家の家督を継ぎ、天保八（一八三七）年、小楠が時習館居寮長として米十俵を給せられたのがかれの二十九才の年であつた。天保十（一八三九）年から翌十一年にかけて、小楠は江戸・水戸・東北地方に遊学し、ことに江戸に於ては大学頭佐藤一斎や中国古典の碩学松崎儼堂、水戸藩の藤田東湖らと交つたが、江戸に於て酒乱のあけく藩の秘密事項をもらしたためらしく、十一年には掃圀を命ぜられ、兄時明（左平太）の一室に閉居逼塞の身となつた。

化政・天保初年のこの時期は、熊本藩の社会情勢、ことに地方経済と領主経済の構造が大きく変化した時代であつた。<sup>(6)</sup>領主経済が商品・貨幣経済による庄迫で破綻を示し始めたのは、いずこも同じ元祿・享保の十七世紀末から十八世紀初頭にかけてであつて、ことに一七五〇年代、六〇年代の宝暦の藩政改革は、所謂名君細川重賢（第七代）による専売仕法の実施、年貢徵集法の強硬化、地方特権商人の保護等で、この頃から熊本の國産燼・楮・養蚕が藩の財源と化し、また金納郷土制や豪農の惣庄屋職が成立するものこの頃である。このように領主が殖産興業という形で國産開発に努力するのが

所謂名君改革の特色であるが、それが十九世紀前半の化政・天保年間ともなると一般の地主もその経営の中に商品作物をとりいれざるを得ない状態となる。徳富家・竹崎家などの行なった主殺手作とたばこ・菜種子の栽培、広瀬家などの行なった寄生地主と質屋・酒屋の兼業は、その二つの方法であって、結局は地主手作が奉公人給銀騰貴のために成り立たなくなつたことを意味する。

## 第二期、実学党形成時代

小楠が遊学時代に見聞した時勢の動きは以上のような幕藩体制の変質の史実であつて、事実かれは諸藩の経済情勢については嘉永四(一八五二)年の上国遊歴に際し詳細な観察を行い、柳川・久留米・秋月・下関・長府・徳山・岩島・広島・福山・松山・岡山・姫路・紀州の藩内情について極めて興味深い報告書を作製している。天保十二(一八四一)年、藩御三家の一つに数えられる長岡監物(米田是容)、藩奉行下津休也、その他藩中級武士荻昌国・元田永平らが陽朱陰王の時習館学校派に対抗して実学党を形成し、その指導者に小楠も参加しているのであるが、それは以上のような藩の社会的危機に対処する目的のものであつたことは疑いのない所である。しかし実学党の当初の大義名分はなお朝鮮の過激な朱子学者李退溪の響に倣う藩儒大塚退野(寛延三年・一七五〇没)に復えることであつたが、弘化元(一八四四)年の藩主咨誼直書に「兎角文武共に忠孝を本として実学、実芸の者一人にても出来候へば大慶に存候ことに依て、向後は文武共に師役の面々門人の多少等眼前の盛衰に不<sub>レ</sub>拘、実意を以て本筋に教導いたし候様有<sub>レ</sub>之度候<sub>レ</sub>。」とあるように、実学・実芸の言葉は既に実践倫理だけでなく功利主義的事功への関心

を多く物語っている。小楠も嘉永六(一八五三)年、越前藩の村田氏寿へ贈つた書に「朱子平生の義気天下の人心を感動し、尤も兵事に分曉なるは其の書を見て明かなり、挙て三軍の司令たらば、棄穀諸葛の兵たるもの誰か疑を容る可けんや。……然れば朱子と遊ぶもの武事に疎く治乱常変にせざるは、腐儒なれ迂濶無用の学者にて、今の徳操たらん人の笑ひを取るは此学の大なる恥ならずや、記して同学の諸君子に告ぐと云<sub>レ</sub>爾<sub>9</sub>。」といっているように、南宋に於ける朱子及び朱子学者の宋王朝への勤王と夷狄に対する革夷の弁にすぐれた事業を認め、ことに朱子の義気と武事に民族主義的な評価を与えている。これを以つても分るように、小楠の朱子学は小楠の後年の富國強兵論に通ずるものはあつても、朱子学の巨大な自然・人生両哲学の体系は殆んど理解されていないようである。わが国十三世紀初頭に輸入された朱子新注学は理気二元論と「無極而太極」に象徴される自然哲学と人生哲学の体系であり、その根柢にあるものは唯物論的な「氣」と唯物的でありながら汎神論的であり同時に倫理的な「理」の二元であつたが、それはついにわが国では完全な理解がなされず、精々「心学的」な側面のみ理解の手掛りを求め清原家学や林家学を十七世紀に完成せしめたに過ぎなかつた。小楠もその点ではこれら日本の朱子学派の人々と何ら異なる所がなく、もしその特色を求めるとすれば、朱子の学的態度であり研究方法である「静坐工夫」とは、正反対の功利主義的実践であつたといえる。勿論朱子の「格物窮理」には元来自然科学的な実験と体験主義があるが、それでもなお「格物窮理」には象牙の塔の非世俗性が濃厚であつた。

朱子（一一三〇—一二〇〇）が生をうけた南宋の時代は北狄金が南下して汴京を陥落せしめ、徽宗・欽宗以下皇族千二百余人が北方に拉致され、高宗は身を以て南に逃れ臨安に遷都した困難の時代であった。朱子の父左承議郎革舟はこの外患のさなかに敗戦論者秦桧らと争って失脚した勇敢な攘夷論者であった。朱子もまたこの点では父以上で、一一六二年高宗に奉った封事には「堂々たる大宗自ら祖宗の領土を奪還すること能わず、かえって仇讎の夷狄に哀願するは陛下のために羞ず」という一節があり、当時の売国的俗論派韓侂胄らに謀られて煥章閣待制兼侍講という献替の栄職を奪われ、朱子学派は偽党・逆党・死党として禁教の憂目を見るという苦難の歴史を経験している。小楠の朱子学理解はこのような朱子の生涯と朱子の時代の外圧に焦点が合わされているようで、朱子哲学そのものについては殆んど門外漢といっても酷評でないといえる。

かくして天保十四（一八四三）年には兄の家で実学の家塾を開き、徳富一敬一の同志が多く入門し、次いで弘化四（一八四七）年には独立の家塾を新築している。

この時期に於ける小楠らの実学党の運動は、以上のように時習館に拠る藩主流の学校派の学問に対する批判として出発したものであったが、その背景には藩財政の危機と地方支配の困難さがあり、小楠は先の江戸遊学に際し、ことに水戸藩の藩政改革の実際を藤田東湖に学び、それを熊本藩にも実行することを目的とした運動であったことはいままでもない。天保十四（一八四三）年、小楠が起草した「実学党綱領」<sup>12</sup>には、且つて宝曆改革に反対した人々が実学党を形成した関係からも、第一に下士の藩上層批判であり、第二に宝曆

改革以来の専売仕法が熊本城下の特権御用商人だけを利して藩庁及び地方の経済にプラスにならないことへの非難であり、第三にはこのような貨幣・商品経済が封建制の支柱である主穀農業を破壊するもので、人口構成の面からも農村人口の城下集注を是正するために人返し政策を要求している。これには当然藩上層の激しい抵抗があったが、先にあげた藩主寄附直書は実学党に対する藩主の賛成意見であったとするならば、実学党の藩政改革の方途は当時にあつては避け得られない革命への道であつたことを意味する。

それにもかかわらず藩主流の迫害は厳しく、嘉永四年には上國遊歴を企てて一時熊本を離れ、福井藩に身を投じて嘉永五（一八五二）年には福井藩主のために「学校問答書」<sup>13</sup>を奉り、これより福井藩と小楠との関係が緊密化してゆく。この旅行を契機として小楠は福井の由利公正、長州の村田清風・吉田松陰ら天下の先覚との交際を始め、嘉永六（一八五三）年、ペリー来朝の年には長崎へ露使迎接のために来ていた幕吏川路聖謨に会うため藩の内使として出張し、献白書「夷虜応接大意」<sup>14</sup>を聖謨に託している。この頃から小楠の藩の要路としての活動が始まり、かれの藩政への参劃は顕著となつて来たようである。またこの年、齢四十五才にして小川吉十郎の娘ひさを娶り、翌安政元（一八五四）年には兄時明が没したため家督を継ぎ、藩番方二百石の藩士に列した。同時に兄の遺孤左平太・大平を准養子としてその教育に努力した。この年はまたペリー再来、日米和親条約締結の年でもあり、これより小楠は國際的にも視野を拡め、攘夷論を棄てて開國論に傾斜してゆく。

### 第三期、実学党分裂時代

実学党の領袖長岡監物は学校派の抵抗によってその後失脚し、安政二（一八五五）年には小楠とも絶交するに至った。実学党が商業資本化しつつあった豪農層と提携を始めたのは天保末年からで、改革綱領が決定した頃には佐敷の惣庄屋徳富一敬・矢島直方・竹崎律次郎らがその傘下にあつたが、熊本藩の場合、惣庄屋は各手永（一般の藩の組に相当する）を支配して地方支配の行政面に広範な権力を持つており、金納郷士として一領一匹の身分資格を持つものが多かった。安政二年に長岡監物の藩士層から離反した実学党は、以後實質的には実学豪農党となり、小楠の指導の下に矢島・竹崎・徳富の三氏を領袖とし、安場保和・山田武甫・嘉悦氏房・宮川房之ら少數の藩士以外は何れも豪農層が実学党の成員を構成していた。かくて、実学豪農党は内政的にも対外的にも反領主的な性格を帯び、草莽開國論を唱えて藩外諸勢力とも氣脈を通ずるに至った。小楠にとつて安政二年は内外ともに実に多端な年で、同年妻のひさを病に失ひ、また沼山津に居宅と家塾を新築したのもこの年である。

小楠の旧宅の一部は現在も熊本市秋津町沼山津一六五四番地に現存し、十数年前まで旧宅の居間が昔のままに保存されていたが、現在では熊本市の所有となり、熊本市役所秋津支所長野仲教氏が入居され相当改造されている。それでも小楠の時代に植えられその書簡にも出てくる梅の木や山茶花の生垣などが往時のままであり、小楠がなぐさみに釣糸を垂れた木山川の清流が窓下を流れ、小楠の鍾愛おこなわなかつた沼山津の風物が時代の彫琢をまぬがれて今に見うるのは喜びの限りである。ことに沼山津の庄屋弥富家とは永い親交があり、両家を結ぶ専用道路を足繁く通つた小楠の逸話は、当主弥富

秀次郎氏から親しく聞くことが出来るし、また弥富家所蔵の小楠関係の書簡や遺品は小楠の人柄を物語つて余りがある。二百石取の中級藩士小楠には幕末の経済生活が大変な重荷であつたことは想像に難くなく、弥富家はこの面でも相当に頼りになつたようである。

安政三年には矢島源助の妹つせと再婚し、翌安政四（一八五七）年には長男時雄が生れている。この年はハリスとの間に日米修好通商条約が結ばれ、外交問題をめぐつて諸藩の動きが急に活発になり、同年越前藩から村田氏寿が小楠を沼山津に訪れ、小楠に越前への招聘の主命が伝えられた。

#### 第四期、実学豪農派と越前藩の改革

安政五（一八五八）年、小楠五十才の年いよいよ福井藩からの招聘が熊本藩庁からも許可されて、福井では五十人扶持の顧問格で福井藩校明倫館に出仕することとなつた。このように熊本と福井との深い関係は松平春岳が細川斉護の女孀であつた姻籍関係によるもので、福井に行つた小楠は橋本左内・由利公正らとともに福井藩政の改革に従事した。しかし安政五年は大老井伊直弼の就任の年で、幕府の独裁的恐怖政治は同年春岳に隠居謹慎を命じ、翌六年には左内が刑死し、また一時熊本藩政の上に復活した監物も六年に没し、この間安政六（一八五九）年と万延元（一八六〇）年に再度小楠は福井と熊本の間を往來している。万延元年には越前藩の「藩政改革綱領」を春岳に献り、富國・強兵・士道の三論を論じ、ことに地方商業資本の育成と貿易富國強兵の三策は小楠の最も得意とする主張であつた。由利公正の財政改革や春岳の幕政改革はなお公武合体の大筋を出るものでなかつたが、それには小楠の学識経験が多く参考と

なっているようである。小楠は文久元年から三年にかけて春岳や福井藩主松平茂昭に従って江戸と福井の間を往来し、文久三（一八六三）年、松平春岳が幕府の政治総裁職を辞任してからは、福井藩の藩論の急激な左傾に小楠は主導的な役割を果している。かくて福井藩は小楠や公正らのイデオログの指導下に福井の藩政改革派をかたまって倒幕的列藩同盟に接近し、幕府の參觀要求を断つて大挙京都に押しよせ、朝廷に入説しようとするまで藩論を推進した。しかし文久三年は朝廷の攘夷決行の決意、及びその後の朝議一変が示すように政局の激動期であったため、福井の藩論も急変し、ついに小楠は福井藩主流から追放され、同年熊本へ帰郷を余儀なくされている。しかし帰郷した小楠が知行召上、土席差放という封建武士としては最も重い処分をされているのであるが、それについて一般には文久元年沼山津の禁猟区で小楠が鉄砲を放った所謂榜示犯禁事件、及び同二年江戸に於て同藩士吉田・都築らと酒宴の席で刺客に襲われ、小楠が友人の危急を顧みずその場から遁走した武士道違背事件の二つがあげられている。ことに二番目の事件は肥後武士の面目丸つぶれの事件といわれているが、おそらく小楠の土席刺奪の処分は、藩の政治的立場にも影響のある福井藩に於ける小楠の行動に關係するものと思われる。かくして沼山津に隠棲した小楠は明治維新までこの地を動くことが出来なかった。

しかし沼山津への名士の往来は決して稀ではなく、元治元（一八六四）年には土佐藩の坂本竜馬が訪れ、熊本藩士井上數との対談は「沼山対話」として筆録され、小楠の二人の甥左平太・大平は幕府旗本の土勝海舟の神戸の塾におくられている。

慶応元（一八六五）年には竜馬が再度沼山津を訪れ、元田永平もしばしば小楠と対談して「沼山閑話」を筆録している。沼山というのは小楠の別号である。

慶応二年には左平太・大平を長崎からアメリカに留学させ、また越前の下山尚が来訪して時局に関する小楠の意見を求めている。

慶応三年には維新の新政について小楠はその意見を春岳に献り、同年ついに朝廷から小楠への召命が熊本藩庁に伝えられ、土席すらない小楠がなお当代の先覚者として天下にかくれもないことを物語っている。

#### 第五期、小楠の出京

明治元（一八六八）年、維新政府から熊本藩庁に対し再度小楠への徵命がもたらされ、藩庁はこのような客観情勢の変化に処して、ついに小楠の土席を復し同年閏四月四日小楠は維新政府の徵士として、つづいて参与として維新政府に参劃することとなった。小楠の徵命については以前から深い関係のあった由利公正や、熊本藩とは友好的であった薩摩藩の大久保利通らの推挽によるもので、同時に熊本藩の藩政権をもこれらの中央勢力を背景に小楠らの実学豪農党が握ることとなる。上洛後の小楠は従四位下参与として草創期の維新政権に協力し、その寓居は京都大宮四条下る灰屋八兵衛方、次いで同高倉通丸太町南の西側、井上九兵衛方に卜された。九兵衛は細川家初代忠興の養父に当る細川藤孝幽齋以来、肥後藩用達をつとめた商人で、その居宅は高倉錦小路北、銀行集会所のある地で、元薩摩屋敷の庭と井上家の町筋に面した高塀と門が残り、小楠の居間も最近まで残っていた。その後、寺町通竹屋町上る西側、下御霊神社

鳥居前の口入屋大垣屋に寓居を移し、上洛後殆んど病臥中であつた小楠は明治二(一八六九)年正月五日、参朝の途上、寺町通の出雲路家の前で刺客に襲われてその生涯を閉じたのである。その時小楠は六十一才で、三月には東京京都のことがあり洵に惜しむべき不幸であつた。現在小楠暗殺の現場には「横井小楠殉節地」の碑が建てられている。刺客は何れも地方出身の郷士や軽格武士で、彼らが懐中していた斬奸状に「此者……今般夷賊に同心して天主教を海内に蔓延せしめんとす」という一節があるように、小楠の西教に対する態度は、この時期にあつてはなお世の疑惑を招くものであつたこと分る。

明治二年の熊本藩では旧藩主第十二代細川韶邦が知藩事を辞任隠居せしめられ、実学家農党が推す細川護久がその後を継いだ。かくて大久保・由利らが維新政権の一翼に加えた熊本実学党は藩政権を担当するに當つて竹崎律次郎・徳富一敬ら豪農が中心となり、その下に津田信弘・山田武甫・太田黒惟信・安場保和らの豪農派藩士が参劃した。ことに豪農出身の金納郷士徳富一敬・竹崎律次郎が民政局長として郡政の実権を握つたことは異数のことに属する。

明治四(一八七二)年に始まり明治九(一八七六)年に終る熊本洋学校はこのような実学家農党藩政権のもとに経営されたことを思うならば、辺境の地熊本に最も開明的な洋学校とその思想が成長したことの政治的意味は充分理解出来るわけである。

しかし維新政府は明治四年の廃藩置県を契機として藩閥政権から有司擅制の官僚主義政権への方向をとり始め、熊本藩の場合明治六(一八七三)年、白川県権令安岡良亮をして熊本藩の実学家農派に

弾圧を加えしめ、嘉悦氏房・林秀謙・徳富一敬・倉園又三ら県上層部の実学派は掃され、藩政権の主体性を官僚主義的に中央に吸収する内政干渉が強力に実行に移された。

この時期に熊本洋学校の生徒ら三十五名が西教に入信し、明治九(一八七六)年一月三十日を期して熊本城南花岡山に血盟し、奉教趣意書を掲げたことは、熊本洋学校の進歩性と小楠以来の実学党の開明的伝統を、新たに開かれた世界史の舞台上に誇示し、更に有司擅制的維新政権の専制政治に対して強く抗議する意図を含んでいたことも否めない事実である。時あたかも新島襄のもとに京都で始められ、プロテスタンティズムの勤勞倫理と近代國家日本への熱情と國士的風格とを持つ同志社がこれら熊本バンドの青年たちに天下の檢舞台としてその目に映じたことは当然であろう。同志社は明治八(一八七五)年十一月二十九日に創められ、熊本洋学校と熊本バンドの人材四十名が大挙同志社に入學したのはその翌年の明治九年九月のことであつた。これら學生の中に熊本実学党の指導者横井小楠の長子横井時雄や徳富一敬の長子徳富猪一郎らがあり、また後年の同志社を背負つて立つ海老名弾正・小崎弘道らが名を連らねていたのである。京都の地に死した横井小楠はその子時雄を始め実学党の後輩によって栄えゆく同志社を京都に見たことは奇しき因縁である。

## 二 小楠の実学と西教

横井小楠の幕末維新史上の役割については第一章に述べたように主として熊本藩政と列藩同盟の一翼を担つた政治家として歴史的に

評価することが出来る。しかし幕末の日本が英・米・露・仏等西洋の近代国家と世界史的交渉を持ち、当時のわが国は、且つての日本とは本質的にその構造を異にし、対内・対外主権として本格的な弁証法的世界の歴史の中で国家としての必要な条件を身につけるとともに国家が本来的に持つ世界史的苦悩をも始めて経験したのである。その限り小楠は単なる政治家として済される筈はなく、当然世界史の中に自己を形成し、また日本の近代国家を創造するための理念を求めざるを得なかつた筈である。その点幕末維新の歴史は結論と成果を得るため一日を争つた急湍の歴史であり、従つて現実の目的のためには手段を選ばないマキャベリズムが横行したことも事実であるが、しかし新しい国家の理念と新しい世界観の獲得を閑事業として見過すことは許されない。世界史は概念的には普通であり、その故に具体的な個別、ことに個々の国家の事業を超越するものであるが、一つの国家の営みが世界史的意義と事実を確保するためにはずぐれて精神的でなければならぬ。ヘーゲルの「世界歴史による審判」<sup>(18)</sup>はどの国家にも免れ得ないことをいい、国家の実践は特に高い実践倫理に裏づけられねばならないことを警告している。それは世界史の審判によって道義的な責任を問われるというようなものでなく、崇高にして自信に溢れた実践倫理を持たない国家の営みは世界史の中に滅亡し、生命を失うことよつて罰せられるというのである。所詮世界史とは精神的にも存在価値のある国家以外の国家を生存せしめない生存競争のきびしい場であるという意味を持つ。小楠が政治家として苦勞しただけでなく、その指導理念として実学を提唱し西教に心をひそめ、政治生活以上に思想面に於て苦吟した

ことは歴史的には正しかつたのである。また小楠が史的人物としてすぐれているのは実はこのような点に關してであり、これを同時代の他の人物と比較研究するならば、その優秀さはおのずから明らかになるであらう。

小楠の実学提唱は先に述べたように天保十二（一八四二）年、兒時明の一室に閉居遁塞中に始つたのであるが、それが政治哲学として、また実践倫理としての哲学体系を持つたために中國哲学の外にプロテスタンティズムの西教をも消化せねばならなかつた。このような見地から小楠の実学と西教との關係、さらにそれがどのような形で小楠の政治的思想的実践倫理となり得たかを觀察するために次の四つの史料をあげることが出来る。

第一は安政二年、沼山津にあつて実学党の分裂に悩んだ頃の「沼山閑居雜詩」<sup>(19)</sup>、第二は安政三年の「越藤村田三郎に与ふる書」<sup>(20)</sup>である。第三は土席を差し放たれて沼山津に隠棲した元治元年の「沼山對話」<sup>(21)</sup>、第四は同じく慶応元年の「沼山閑話」<sup>(22)</sup>である。第一・第二は小楠の作品であるが、「沼山對話」は熊本藩士井上毅に小楠が話した内容を井上が筆録したものであり、「沼山閑話」も同じように熊本藩士元田永孚が筆録したもので、第一・第二とは内容的に懸隔もあり、これらには筆録者の意見が或程度混入しているのではないかと思われる。井上毅（弘化元年・一八四四—明治二十八年・一八九五）は維新後、法制局長官に任じ、帝国憲法・皇室典範・教育勅語の起草に關与し、晩年枢密顧問官・文部大臣を歴任した理論家肌の人物である。元田永孚（東野）（文政元年・一八一八—明治二十四年・一八九二）は明治時代宮内省に出仕して明治天皇を教



育し、「幼学綱要」の編纂に従事し、晩年宮中顧問官、枢密顧問官に任じた。なお史料第二の越落村田巳三郎は小楠を福井に招聘すべく使者として沼山津を訪れた村田氏寿のことである。このように熊本藩の後輩に大きな影響を及ぼしたのが小楠の実学と西教の思想であって、井上や元田はこのような小楠の思想を受けて明治時代に政府のイデオログとして活躍したのである。

藩主斉誠直書の「実学実芸」以来、小楠の学問は一般に「実学」と呼びならわされ、その学統は「実学党」と称せられているが、何故か小楠は「実学」という言葉を好まなかったようで、かれの著作にこの言葉を見出すことは困難である。それよりは小楠が多く用いている表現は「堯舜の道」であり「三代治道」或いは「唐虞道」である。

「沼山閑居雜詩」人君何天職、代天治百姓。自非天德人、何以懷天命。所以堯舜舜。是真為大聖。迂儒暗此理。以之聖人病。嗟乎血統論。是豈天理順。

唐帝則昊天。授民以四時。繼之虞帝聖。七政齊其儀。所以天人間。脈路不相離。規模何其大。治化及蠻夷。……

虞帝拳三政。其中有百工。財利之所生。人情之所同。治而和其職。百貨四海通。後王不法此。天下常困窮。……

小楠自筆本「小楠堂詩草」は横井時増氏の所感にかかり、昭和五年その影印本が徳富蘇峰氏らによって印行されたのであるが、その中に「沼山閑居雜誌九首」があり、安政二年頃の小楠の思想を知るのに最も信憑度の高い史料である。右にかかげた小楠の所謂「実学」はここでも「堯舜の道」「唐虞の政」という表現をとり、第一

に堯舜の治道が天に則とること、第二にその血統即ち学問としての道統が堯舜・三代・孔孟の原始儒教から、朱子哲学を経由しないで小楠自身が受けているとしている。第三は堯舜の道は民政であり利用厚生であり、惣じて民政のための制度文物でなければならぬことの主張である。

小楠のこの学説は一見して享保時代、十八世紀初頭の古文辞学者荻生徂徠（寛文六年・一六六六―享保十三年・一七二八）の「先王之道」の主張と酷似することに気がつくであろう。徂徠の著「弁道」に、

先王之道。先王所造也。非天地自然之道也。蓋先王以聰明敏知之德。受天命。王天下。其心一以安天下為務。是以尽其心力。極其知巧。作為是道。使天下後世之人由是而行之。豈天地自然有之哉。伏羲神農黃帝亦聖人也。其所作為。猶且止於利用厚生之道。經纘項帝誓。至於堯舜。而後礼楽始立焉。夏殷周而後然始備焉。

「弁道」のこの内容を見るならば、徂徠の学説は小楠のいう堯舜の道、堯舜孔孟の道統、及び民政と利用厚生への何れもがここにあることを見るのである。徂徠と小楠ではその間五十年の距りがありながら、両者の思想は儒学に関する限りこのような共通点を持つことは、享保の治と幕末の政治とともに近世的な意味に於て人間が人間の力を政治の側面に於て自覚したことを物語る。ルネサンスは人間が人間性に対する自信を回復し、ことにルネサンスの人間は最初に古典的・芸術的であったことは周知のところである。しかしわれわれが近代史の性格を規定する場合、そこには近代国家の存在を無

視出来ないどころか、それがすべてであるといつても過言ではないであろう。そしてその場合の近代国家とは政治の優先であり、政策の全能であり、惣じて十九世紀の人間の間人発掘は政治的人間への全面的な信頼と自信であった。その意味で享保の時代はわが国近代の礎石器時代ではあるが、それはいつの日か本格的な近代への道を予量せしめるものさうちに蔽っていたわけである。小楠の幕末政治史観には、既に近代に近く、当然徂徠とは異つたものを見かけの上の相似の中に於てさえ認められねばならない筈である。

「堯舜の道」乃至は「唐虞三代の治」は小楠・徂徠がともに理想とするところであるが、その意味は堯・舜・禹・湯・文・武・周公ら所謂「先王」と称せられるこれら中国古代の帝王の政治上の事蹟が詩経・書経・礼記等所謂中国古典に明瞭な形で記載されている事情に由来する。勿論これら中国古典の記事は神話伝説の域を脱しないことはいうまでもないが、徂徠・小楠ら近代政治家にとつてはこのことにかかりなく、ただこの兩人のいいたいことは政治優先以外の何ものでもなかったであろう。かくて「先王之道」と「民政」「安天下之道」「利用厚生」「礼楽」等、政治的支配者の政策的効果とその製作物を「堯舜の道」という言葉で象徴し、古典をふまえながら却つてそこにすぐれて近代的なものを暗示しているのである。

ただここで注意せねばならないことは両者が口をそろえて「天命」や「天命」に従うことをいっている点である。中国古典の「天」は祭天の民族宗教を太古に持ち、十二世紀の朱熹の哲学にあっては「無極而太極」という倫理の所在としての天であり、また政治とい

う特殊にして具体的個別を、天という普遍にして形而上学的理念に弁証法的な関連を求めようとする。中国古典の「天」はその意味では世界的普遍と遠く距るものではないが、なお太古の祭天の宗教儀礼以来の宗教性に於て Pantheism の前近代性が附着して離れないことは否めない。それにしても徂徠と小楠が「天」に於て政治哲学を留意したことは、ともすれば政治が陥りがちな効用の無思想さを警戒している意味で卓見といえよう。小楠の場合は次にこれが西教の理解に発展する点に於て特に重要な歴史的意義を持つのである。

しかしこの問題を進める前に、以上のような小楠・徂徠比較論は果して歴史的に正しいかどうか、即ち小楠は徂徠の思想を研究の上で利用したのかどうかについて検討する必要がある。本稿が小楠の歴史学的研究を標榜する限りに於てこれは一応明らかにしておく責任があるわけである。

小楠の著作の中に徂徠の名が見えるのは、安政二年の「陸兵問答書」の中の一箇所にすぎないが、「外国を相手として兵を論じたるは林子平に始り、物茂卿といへ共此見識は無<sup>分</sup>之<sup>分</sup>候」といっている。「陸兵問答書」は誰に書き贈つたものか分らないが、小楠の兵学であり、幕末に於ける富国強兵策の一環として近代戦術を兵学の歴史の中で考察することを目的とするものである。物茂卿即ち荻生徂徠には「鈐録」及び「鈐録外書」という兵学に関する著述があり、當時は広く読まれた有名な書物で、おそらく小楠のいう徂徠の兵学とはこれを指すものと考へざるを得ない。「陸兵問答書」が「物茂卿といへ共……」といっているように、小楠は徂徠を高く評価し、同時

に徂徠と小楠の現代は時代の異なることをいって、林子平を同時代の兵学者としてその正当さを認めている。小楠はこのように徂徠についての智識を持っているのであるが、これ以上のことは他に史料がないので確め得ないことは遺憾である。しかしわが国西南地方は徂徠在世中からその高弟山泉周南が防長に藩儒として活躍し、その羽翼は極めて広く宛然と畿園干園を形成した。肥前には同じく畿園党人の詩僧釈大潤が有名であり、筑前には亀井南溟が徂徠学を継いでその下に広瀬淡窓ら多くの徂徠学派の人々を輩出している。熊本の下には徂徠が神童として推賞おくれたわなかった水足屏山（寛文十一年・一六七一一享保十七年・一七三二）及びその弟子秋山玉山（元祿十五年・一七〇二—宝暦十三年・一七六三）があり、両者とも熊本藩に仕えた儒者である。その門流はその後も熊本に繁栄した関係上、小楠が徂徠学に接する機会は当然あったものと考えられる。

しかし小楠の実学は徂徠の古文辞学とは正反対の方向を持ち、徂徠が文芸第一主義を主張するのに反し、小楠は文芸を無用の閑事業としてこれをしりぞけている。

後世之漢人如何成故に如此之大道之本意を誤り、唯々書を読み、文詩を作候を学問と心得候哉、後世道衰廢人道理るるは全く堯舜孔子大道を失ひ候に有之候えは、当今漢人深く此処を省察致し、無用之文学を相止、三代の大道再び其土に明るるに於ては其国中興掌を返すが如し<sup>(28)</sup>

徂徠の学問は小楠の実学に近似した復古学と、小楠が排斥する主情主義的古文辞学の二つから成り立っているが、徂徠の場合、享保の初期商品資本主義社会を背景にして古文辞学に重点が置かれてい

<sup>(29)</sup> 徂徠が熊本藩儒水足屏山に与えた書簡に「蓋詩縁人情」。或出三田峻紅女之口<sup>(30)</sup>とあり、また徂徠の文詩のサロン畿園の盛況については「蓋万今之時。吾党之士。傾<sup>(31)</sup>海内一矣。毎<sup>(31)</sup>会揚<sup>(31)</sup>解<sup>(31)</sup>稱<sup>(31)</sup>詩。以至<sup>(31)</sup>於酒酣。則吹<sup>(31)</sup>笙<sup>(31)</sup>鳴<sup>(31)</sup>絃<sup>(31)</sup>。蕭<sup>(31)</sup>管<sup>(31)</sup>通<sup>(31)</sup>和<sup>(31)</sup>。」といっているように、徂徠は完全に文詩の人であった。畿園がその後十八世紀後半に殆んど全国を覆う勢を示し、松平定信による寛政異学の禁もその対象は畿園の古文辞学とその党人であった。小楠が文詩を「無用之文学」として軽蔑しているのは、十九世紀後半の幕末に於ては、もはや徂徠の時代のような文学の享楽など思いもよらず、日本の民族国家は生死の竿頭に立っていたのである。かくて小楠の実学は思想構造に於ても先に述べたような事功第一主義をこらざるを得なかったし、また徂徠とは思想のスタイルに於て似ていても、その本質的な世界観は全く別のものであった。「沼山閑居雜詩」に、

西洋有<sup>(32)</sup>正教、<sup>(32)</sup>洋人自<sup>(32)</sup>稱<sup>(32)</sup>正教、其教上帝、戒律以導<sup>(32)</sup>人、勸<sup>(32)</sup>善懲<sup>(32)</sup>惡、戾<sup>(32)</sup>上下信奉之、因<sup>(32)</sup>教立<sup>(32)</sup>法制、治教不相離、是以人奮勵、雖<sup>(32)</sup>我有<sup>(32)</sup>三教、人心無<sup>(32)</sup>所<sup>(32)</sup>繫、神仏良荒唐、儒亦落<sup>(32)</sup>文芸、政道与<sup>(32)</sup>教法、職<sup>(32)</sup>々見<sup>(32)</sup>其弊、<sup>(32)</sup>洋夷交進<sup>(32)</sup>港、必<sup>(32)</sup>以<sup>(32)</sup>貨利<sup>(32)</sup>曳、人心溺<sup>(32)</sup>異教、難<sup>(32)</sup>禁<sup>(32)</sup>是其勢、嗟<sup>(32)</sup>乎<sup>(32)</sup>唐虞<sup>(32)</sup>道、明白如<sup>(32)</sup>朝露、捨<sup>(32)</sup>之<sup>(32)</sup>不<sup>(32)</sup>知<sup>(32)</sup>レ用、<sup>(32)</sup>甘<sup>(32)</sup>為<sup>(32)</sup>西洋<sup>(32)</sup>隸<sup>(32)</sup>。

安政二（一八五五）年頃の小楠の西教に対する意見がこれであって、ここにいる正教とはプロテスタントのことであり、且つそれが西洋の近代国家にあつては政治文化両面の基本的な理念であることを受けている。極く最近<sup>(32)</sup>までの西洋国勢資本主義社会は Max Weber の「プロテスタンティズムの倫理」を以て<sup>(32)</sup>

でもなく、神の國への協業としての Beruf という職業観及び勤勞倫理によつて支えられていたことはかくれもない事實であつて、小楠はこの点に西教の優越さを認めている。そして日本には西教に對応出来るものとして小楠は儒・仏・神の教えをあげているが、仏・神の荒唐と儒教の文藝化はこのような歴史的役割を果すには、もはや不適格であることを指摘する。しかも當時にあつては西教に對する日本人の受けとり方が功利主義を一步も出ることなく、西教の勤勞倫理、及び堯舜の仁政に相當する福音がついに理解されなかつた。つづいて小楠は次のようにいっている。

ペートル其後尚又燕京に遊學に遣し（距今三十五六年前後の由）

此度は專聖經を研究致し、書經詩經論語之三部を其國之文字に翻譯致し、國都に持歸其大學校之詮議に懸け候処、第一規模之廣大なる經論に明齊なる修己治人政教一致なる所に深く驚愕致し、三千年之古如此之道明なる堯舜之聖徳に於ては誠に奇異の思をなし、其奉る所の天主教之教と全く符節を合候と論決致候<sup>33)</sup>

ロシアのペートル大帝のこのような事蹟を何所から聞いたのか分らないが、当時の洋学者の知識としては佐久間象山のそれらとともに普通一般のものであり、おそらくそのニュース・ソースは長崎の通詞あたりと思われる。しかしキリスト教と堯舜の道とをその世界観に於て符節を合するものと見るのは小楠に独特の考え方である。小楠はこのように、民族文化が「世界史の審判」にたえ得るためには、かれの実学が功利主義に終ることなく、プロテスタンティズムとともに実践倫理としての哲学体系と世界史的な規模での世界観を持たなければならぬ。これが小楠の所謂「堯舜之道」であり「正

教」である。

従つてわが國に西教が伝來した場合、國內での理解の仕方は必しも正しくなく、小楠の目から見れば佐久間象山の如きはまさにそのような過誤を犯したのである。

彼我政道之得失盛衰之現実を見候而者不知不覺邪教に落入候は十年二十年之間には鏡に懸て見るが如し、佐久間修理杯は既に邪教に落入たるにて相分り申候、（修理は邪教を唱ふるにては無之候へ共政事裁法一切西洋之道明なりと唱、聖人之道は独り易の一部のみ道理あると承る、是彼邪教に落たる之実境なり）……三代治道に熟せざる人は必ず西洋に流溺するは必然之勢……<sup>34)</sup>

佐久間象山（文化八年・一八一——元治元年・一八六四）は信州松代藩の家臣で、小楠と同時代に洋学、ことに語学と西洋兵備に關しては当代随一の新知識で、小楠の海上兵備を中心とする強兵策は象山のそれに酷似し、象山の小楠に對する影響はおそらく大きかつたであろうと思われ。象山の思想を象徴する言葉として「東洋道德。西洋芸術」が有名であるが、小楠が批評している頃の象山は既に「東洋の道德」を捨てて「西洋の芸術」即ち自然科学だけを信頼し、東洋にも日本にもはや抛るべき哲学のないことを宣言している<sup>35)</sup>。小楠の象山論にあるように、象山は父一学に「易」を習ひ、数学は同藩の士、竹内錫命・町田源左衛門・宮本市兵衛正武らに學び、その他の洋學に關しては象山はそのすばらしい語學力で原書を讀破して自得したものである。小楠はこのような象山の所謂「西洋の芸術」を理解するにやぶさかでなく、また小楠自身も象山と同様に富國強兵策を強調しているのであるが、ただ小楠には「西洋の芸

術」だけに終始する無思想さは何としても賛成出来なかつたのである。

西教を邪教とする小楠の意見は、「天守教の如は。西浮も本意とする事に非ず。此の邦の仏教の如し。唯以是喻愚民。の一法に備ふるのみ」や「然るに近来に至て西洋に致し候ても其士大夫たるものは強ちに耶穌を信仰するに於ては無<sup>37)</sup>之、別に一種経綸窮理の学を發明致候て是を耶穌の教に附益致し候<sup>38)</sup>」のように主として「沼山對話」「沼山閑話」に見る思想である。これについては先に述べたように、「沼山閑居雜詩」や「村田己三郎に与うる書」とは異り、井上毅や元田永孚の主観が多分に混入していると思われるべきで、「村田への書簡」で西教を邪教とする意味は象山のように「三代治道に熟せざる人」の「西洋に流溺する」場合を指すのであって、小楠の意途する所は自然科学が本来的に持つ無思想性への非難であつて、むしろ小楠はペートル大帝とともに「堯舜之聖徳」は「天主教の教と全く符節を合」するものと理解し、キリスト教、ことにプロテスタントイスマの思想性・倫理性を高く評価し、わが国近代国家の世界観としても洵に相応しいものと断定している。かくて元田永孚は小楠との対談に於て、

堯舜をして当世に生ぜしめば。西洋の砲、艦、器械、百工の精、技術の功疾く其功用を尽して。当世を経綸し。天工を広め玉ふこと。西洋の及ぶ可に非ず<sup>39)</sup>

として、慶応元（一八六五）年の時点に於て日本が直面する対内、対外の危機を小楠とともに富国強兵策によって解決しようとしている。「方今若三十万石以上の人に。其人を得て、三代の治道を

講じて。西洋の技術を得て。皇國を一新し。西洋に普及せば。世界の人情に通じて。終に戦争を止むること。いかにも成る可なり<sup>40)</sup>」というのが永孚と小楠の一致した維新への道であつて、それは単に困難を打破するだけでなく、精神的にも物質的にも民族の実践を世界史的にたかめ且つそれに貢献する道でもあつた。ことに小楠の世界情勢の分析は次の点で海軍の充実を焦眉の急と判断していた。

対州一条此節は治り可申、然処是は独り日本之大患と申迄にて無<sup>41)</sup>之世界之大患とも相成可申哉、魯英之勢不兩立遂には乱と相成可申候

即ち当時の世界の形勢を判断するならば、ロシアのシベリア経営と日本海への進出は、イギリスのインドを根拠とする極東政策と対島及びその周辺で衝突するであろうというのが小楠の国際情勢判断の根本である。まことに卓見といふべく、日清・日露の戦は既に維新前に於て小楠が予見していたわけである。そのためには「一致の海軍は本なり、天下の海軍は末なり<sup>42)</sup>」といつてるように幕府を始め諸藩が大団結して國軍としての海軍を強化し、当時の日本の死命を制していた主としてイギリスの砲艦政策（ガンボート・ポリシー）に対処すべきであるといふのである。この点でも海軍と砲艦に関する限り、象山と小楠は全く同じ見解を示している<sup>43)</sup>。

以上のような小楠の富国強兵策は幕末の洋学者や政治家の誰もが考へたところであるが、小楠の場合その実学が技術と思想の双方に涉り、思想的背景の深さは他に例を求め得ないものであつた。小楠の実学党がその後の熊本藩の指導に主役を演じ得たこともこのように大きい思想体系を無視しては考へられない。

(護久)  
世子良之助様へは政府之因循内輪之情実迄具に御承知に相成、実学連にあらざれば人は一人も無之深く一國之情態を御見ぬき被遊候え共只今御人之黜陟有之候ては物論沸騰に御恐れ一日々々と御押移り機会御待被遊候。

この書簡は、小楠の世話で長崎からアメリカに留学した期の左平太と大平に与えたもので、当時の熊本藩の情勢がよく物語られている。それによると、当時の熊本藩では学校派の保守党がいまだに政権を左右し、実学党は若君護久に将来の希望をつないでいることがよく分るし、また護久が維新の実学党政権のもとに知藩事に擁立されたことは先に述べた通りである。

(元田永孚?)  
元田中次にて万事計り合被申候間存付候事は一々此人に申達直様良之助様御聴に相達し候、是は二三年内には必ず変態可致候。

先の書簡の続きがこれで、熊本藩では実学党の小楠や元田永孚が次第に藩内での勢力を拡張し、士席を失ったとはいえないなお小楠の藩への影響力は大きかった。しかも「二三年内に」と小楠がいつているように、翌慶応三(一八六七)年には大政奉還、次いで明治元(一八六九)年の維新政府の成立と、小楠の予想はことごとくに適中しかれの時勢に処する目の確かさを実証している。

かくて「沼山閑話」に元田永孚が小楠の意見として、「方今の天下。危機誠に迫れり。昔旧の名臣を不用。列藩の賢俊を挙ず。長を憎み、薩を忌み、一二の閥臣会桑と事を違ふ是れ誠に幕府の私見にして益々困窮に至れる所以なり。其本に反りて、私心を去り、天下と共に事を為す者の心ならば忽に治まる可し」といっているように、慶応元(一八六五)年の実学党は既に倒幕列藩同盟に気脈を通じて

(保和)(武庫)  
いたわけ、小楠・長岡護美・安場一平・山田五次郎ら熊本藩士への朝廷よりの徵命はこの時期に於ける実学党の列藩同盟への傾斜が大きくものをいっただこととを物語り、学校派保守党政権の崩壊は既にこの時に約束されていたのである。かくて明治三(一八九〇)年には時習館廃止と熊本洋学校及び治療所(古城医学学校)の設置が改革案として決定され、小楠以来の実学が熊本藩に於て維新の制度文物として呱呱の声をあげたのであった。次いで明治九(一八七六)年の熊本バンドの結成は小楠の実学の思想及び世界観の実現として更にこれを一步進めたものであって、熊本洋学校の富國強兵の実学の側面とともに、それは実学家農党の綱領であっただけでなく最も進歩的で、且つ世界的に見て最も多岐に多い近代日本の進むべき道であった。ただそれがついに維新政権そのものにとるところとならず、外圧と大陸政策の現実の中に埋没してしまつたことはわが国近代国家のためまことに惜しむべき限りであった。

- (1) Heller, Die Souveränität, S. 103
- (2) Jellinek, Allgemeine Staatslehre, S. 475
- (3) 石井孝「幕末の外交」参照
- (4) Ranke, Über die Epochen der neueren Geschichte 参照
- (5) 横井小楠の経歴については、山崎正董「楠井小楠」上巻、伝記篇、参照
- (6) 熊本藩の政治・経済情勢については、大江志乃夫「熊本藩における藩政改革」(堀江英一「藩政改革の研究」所収)参照
- (7) 山崎正董「横井小楠遺稿」第四、詩文、三、遊歴聞見書
- (8) 山崎正董「横井小楠」第五章、三、実学党の興起の項に収む

- (9) 「横井小楠遺稿」第一、論著、二、文武一途の説、嘉永六年正月、
- (10) 長岡監物は「孔門大学の教格物致知なる実学」といつているように、かれもまた朱子哲学の形而上学的方法論である「格物窮理」には関心がなく、格物を実学と理解し、孔子と新注四書の一つである大学とを同じものとしてしか理解していない。
- (11) 後藤俊瑞「朱子」参照
- (12) 「横井小楠遺稿」第一、論著(附)時務策、天保十四年
- (13) " " " 一、学校問答書、嘉永五年三月
- (14) " " " 三、夷虜応接大意、嘉永六年
- (15) 弥富家文書(沼山津、弥富秀次郎氏所蔵)  
「受取  
一、 銭六貫目  
右者冬広之刀依御  
所望代料本望通り  
銭ニ受取申候 已上  
七月廿三日 横井小楠 印  
弥富千左衛門様
- 再白 後來此刀ニ付き何之存よりも無是之事」  
この文書は小楠が松平春岳公から拜領した冬広の名刀を弥富家へ譲って生活の足にしたことを物語る。しかしその後余程惜しかつたと見え、何度か取返しを願っているが銭がなく、ついに文書の後書きのような一札をとられている。冬広の名刀は戦時中切断

- して供出し、現在刀の外装だけ弥富家に秘蔵されている。可惜
- (16) 「横井小楠遺稿」第一、論著、六、国是三論、万延元年
- (17) 山崎正壹「横井小楠」第十八章、参照
- (18) Hegel, Die Verfassung Deutschlands, S. 114
- (19) 「横井小楠遺稿」第四、詩文、小楠堂詩草、沼山閑居雜詩、十首
- (20) " " 第三、書簡、六二、村田巳三郎へ、安政三年十二月二十一日
- (21) " " 第五、談録、一、沼山対話
- (22) " " " 三、沼山閑話
- (23)(24) 沼山閑居雜詩
- (25) 小楠書簡、村田巳三郎へ
- (26) 徂徠の「弁道」(日本倫理叢書卷之六)享保二年に成立し徂徠の主著の一つ。
- (27) 「横井小楠遺稿」第一、論著、四、陸兵問答書、安政二年
- (28) 書簡、村田巳三郎へ、安政三年十二月二十一日
- (29) 拙稿「徂徠学の非政治性」史窓第十三号、参照
- (30) 徂徠文集、卷之二十四、復水神童
- (31) " " 卷之二十二、与富春山人
- (32) Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, 3 Bde.; ders., Wirtschaftsgeschichte, Kapitel IV.
- (33)(34) 書簡、村田巳三郎へ、安政三年十二月二十一日
- (35) 在久間象山の「省悟録」
- (36) 象山全集、卷二、時事を痛論したる幕府への上書稿、文久二

・九、「向後は外国を斥して戎狄夷狄と御称呼無御座様……只管外邦他国を貶し學術・技術・制度・文物此方より備はり候と見え候有力の大国を戎狄夷狄と御称呼被為候は甚如何之御儀と奉存候」

(37) 沼山閑話

(38) 沼山対話

(39) (40) 沼山閑話

明治八年熊本市内小学校(明治八年六月調)

第一大区(熊本旧市)小学校、一小区 西阿学校、生徒二百五十人。西唐学校、生徒二百五十人。二小区 慶徳学校、生徒百八十五人。洗馬学校、生徒百五十一人。山崎学校、生徒五十一人。三小区 馬借学校、生徒六十五人。三糸学校、生徒百十三人。新一学校、生徒百二人。四小区 壺頭学校、生徒二十六人。寺原学校、生徒百三十一人。五小区 高原学校、生徒百八十八人。梅野学校、生徒六十七人。藪内学校、生徒四十四人。六小区 千反学校、生徒五十人。井淵学校、生徒五十人。壺外学校、生徒五十六人。壺街学校、生徒、百五十二人。七小区 龍口学校、生徒百五十人。莊藏学校、生徒百十人。松雲学校、生徒四十七人。菊街学校、生徒三十人。八小区 龍谷学校、生徒百十人。龍崖学校、生徒十五人。向台学校、生徒三

(41) 小楠遺稿、第三、書簡、一四六、在熊社中へ、文久三年五月二十四日・二十六日

(42) “ 第一、論著、五、海軍問答書、元治元年

(43) 拙稿「佐久間象山の政治思想」神戸大学紀要、第八卷、参照

(44) (45) 小楠遺稿、第三、書簡、一七六、甥左平太・大平へ、

慶応二年十二月七日

(46) 沼山閑話

十六人。柳川学校、生徒九十五人。京街学校、生徒四十人。赤尾学校、生徒四十人。

第二大区 二小区 出街学校、生徒六十七人。岩立学校、生徒三十二人。柿原学校、生徒二十人。井芹学校、生徒二十三人。六小区 迎町学校、生徒百二十五人。八小区 中莊学校、生徒五十一人。南莊学校、生徒三十七人。春竹学校、生徒六十七人。九小区 大江学校、生徒六十二人。白水学校、生徒六十七人。九品学校、生徒八十六人。園府学校、生徒六十二人。十小区 横手学校、生徒十九人。筒口学校、生徒二十一人。春日学校、生徒百二十四人。

(宇野東風著「我觀熊本教育の変遷」)